



競馬を書くこと、 競馬を話すこと

対談

早見和真

(小説家)

藤原菜々花

(アナウンサー)

山本周五郎賞を受賞した小説『ザ・ロイヤルファミリー』の著者・早見和真と競馬実況界の若き女性アナウンサー・藤原菜々花。実況のシーンの描写で筆が乗ったという作家と、競馬の戦況を的確に伝える実況者が競馬の言葉について語り合う。

アナウンサーを目指して……
競馬知識ゼロからの挑戦

早見 ちょうど『ザ・ロイヤルファミリー』のドラマが始まったところで（※対談日は第一話放送の翌々日）、いいタイミングで藤原さんにお会いできました。

藤原 そうなんです、一昨日、私も競馬関係者の皆さんと一緒にテレビを観ていました。すごく良かったです！

早見 ありがとうございます。ドラマ化にあたって最初にキャスト一覧を見たとき、女優さんが少なくて違和感を覚えたんです。でも、つまるところ競馬の世界というのはそういうことなんです。藤原さん自身、男社会の中でいろいろと苦労も多いのでは？

藤原 確かに、取材で初めて検量室（出走馬毎の負担重量を測定する部屋）に入ったとき、私

以外は全員男性で驚きました。でも、そもそも「ラジオNIKKEI」の中でも、競馬実況をする女性のアナウンサーは私だけなんです。

早見 あ、そうなんです。会社全体の男女比はどうなっているんですか。

藤原 全部で七〇人くらいの組織で、半分弱が女性だと思います。入社当時、女子アナは私だけでしたので、採用面接のときに「男性が多い環境でも大丈夫？」と何度も聞かれたのを覚えています。

早見 男性が多い環境というのは、藤原さんとしてはどうですか。やりやすいのか、それともやりにくいのか。

藤原 やりやすかったですね。女性が珍しいからなのか、調教師や騎手などの関係者の方が皆、

すごく優しく接してくださるので、少なくとも働きにくいと思ったことはないです。

早見 なるほど。周囲からすると、せっかくこの世界に来てくれたのだから育てたいという思いがあるのかもしれないですね。ちなみに、入社した時点で、将来は競馬実況をやることが決まっていたんですか？

藤原 そうですね、決まっていました。

早見 でも藤原さんはアナウンサーになるまで、競馬についてまったく知識がなかったと聞いています。実況の中でも競馬はけっこうマニアックで特殊なジャンルだと思うのですが、不安はなかったですか。

藤原 面接で中野雷太アナウンサーに、「君は競馬実況やる覚悟はある？」って言われましたが、即答で、「あります！ 頑張ります！」って言ったんですよ。しかし

本当は「ディープインパクト」というワードしか知らない状態からのスタートでした。「ラジオNIKKEI」を受けるにあたって、大学四年生のときに一度だけ競馬場へ行ってみたのですが、パドックを見て「コースってこんなに小さいんですね」なんて言っていたく

らい、何も知らなかったですから（笑）。でもそこは、何が何でもアナウンサーになりたい」という気持ちが勝りました。

早見 『ザ・ロイヤルファミリー』を制作したTBSは、テレビでの競馬中継をやっていない放送局なんです。競馬実況を経験しているアナウンサーがほとんどいない中で、レースのシーンがどうなるのか、原作者としては実はちょっと不安だったんですよ。でも、アナウンサーの方が頑張ってくれて、違和感のないシーンに仕上がってくれました。

藤原 それはすばらしいですね。

早見 ただ、これは僕も台本上で見落としてしまった部分なのですが、実は第一話の中で一箇所、齟齬が残ってしまっていて。場内アナウンスで「一着、二着」と言わなければならないところを、「一位、二位」と言ってしまうんです（苦笑）。

藤原 確かに競馬実況では使わない表現かもしれませんが。

早見 こういうの、もし藤原さんがキャステイニングされていたら、現場で気づくわけじゃないですか。競馬実況って、つくづく難しい世界なのだと痛感させられました。



『ザ・ロイヤルファミリー』
早見和真著 新潮文庫

税理士・栗須栄治は友人に薦められて購入した馬券をきっかけに人材派遣会社「ロイヤルヒューマン」へ入社し、ワンマン社長・山王耕造の専属マネジャーを務めることになった。馬主として競馬に熟を上げる山王のもとで栗須は競馬の奥深き世界に引き込まれていく。2019年度JRA賞馬事文化賞、2020年山本周五郎賞を受賞。2025年10月からTBS系列でテレビドラマもスタート。